2025.06

# 伊勢湾台風の教訓を今に

名古屋市港区は、今から 66 年ほど前の 9 月 21 日～28 日に伊勢湾台風を経験しました。

その教訓を活かそうと、体験した方々のお話をお聴きし、今にどんなことが必要なのかを考えるワークショップのお手伝いをしました。

## ☆伊勢湾台風

「1959 年（昭和 34 年）9 月 26 日 18 時頃、後に「伊勢湾台風」と呼ばれる台風 15 号が和歌山県潮岬の西に上陸した。上陸後もあまり勢力が衰えず、早い速度で本州を縦断したため広い範囲で暴風が吹き、名古屋市では最大瞬間風速 45.7m/s を観測した。

台風の進行方向東側に当たった伊勢湾岸では高潮により広範囲が浸水、深夜の台風通過で犠牲者が増え、全国で死者 4,697 人、行方不明者 401 人、住家全壊 40,838 棟、被災家屋は 500,000 棟以上に達し、戦後最悪の台風災害となった。
この台風を契機として、1961 年（昭和 36 年）に災害対策基本法が制定された。」

https://typhoon.yahoo.co.jp/weather/calendar/109/より

## ☆体験談では

名古屋市港区では、1 月以上も水が引かず、子ども達は西区や北区へ 3 か月ほど疎開するなど、大変な被害があったそうです。

その体験を伝えるために、港区役所には募債センターが併設されており、いつでも伊勢湾台風の資料や体験をすることができるようになっています。

(第3種郵便物認可)

伊勢湾台風の被害を踏まえ、避難行動を話し合う住民ら＝港区東茶屋の市南陽交流プラザで

水害避難 ご近所と勘考

伊勢湾台風被災の港区・南陽地区

台風による水害の発生を想定した避難行動を考えるワークショップが30日、港区東茶屋の市南陽交流プラザであった。地元の南陽地区はかつて伊勢湾台風に襲われ、現在もハザードマップで高潮や洪水による大きな被害が想定されており、住民は命を守るためのさまざまな避難方法を話し合った。

南陽地区は高層の建物が少なく避難場所が限られる上、地区の東西を新川と戸田川に挟まれるため、水害時に孤立しやすい。1959年の伊勢湾台風では多くの堤防が決壊し、高潮で約200人が犠牲となった。

ワークショップには地元住民35人や市、大学の関係者らが参加。住民はハザードマップを見ながら自宅周辺の浸水リスクを確認し、どこに避難すべきかを意見を交わした。「とにかく北側に逃げる」と広域避難を訴える声や「暗い夜間は移動しない」と安全に配慮した避難の必要性を求める声が上がった。

その後、災害時に自分や家族がいつ、どこに、どのような手段で逃げるのかをあらかじめ時系列で決める「マイタイムライン」を作成した。

10歳のころに伊勢湾台風を経験した港区七島の加藤和政さん(75)は「浸水時にどう避難すればよいか改めて考える機会になった。地域で死者を一人も出さないという強い気持ちでいる」と話した。

ワークショップは市が企画し、5月27日にも開催した。市は今後、住民からの寄せられたアイデアをまとめて啓発用リーフレットを作成し、8月から南陽地区で全戸配布する。(都沙織)

中日新聞 7月1日朝刊

## ☆ワークショップでは

時代は変わりましたが、今に伝えたい教訓について、考えました。
備蓄はもちろんですが、「まずは、自分の命を守る」「早めに行動する」「水と簡易トイレは必須」などのコメントがありました。普段から自分で考えて行動する、ということが大切なことだと口々におっしゃっていました。

この後、名古屋市さんがまとめて、各戸に配布するとのこと。この地域のみなさんがお手に取って、ご覧いただけますように。

＊貴重なお話を直接聞くという体験をさせていただきました。語り部の必要な意味を痛感しました。この貴重な言葉をどうやって残していくのか？は、次世代につないでいく私たちの使命なのだと思いました。